

エルヴェシウスの思想における

「人間の科学」と「教育の科学」

永 冶 日 出 雄

一、はじめに

一七七二年に公開されたエルヴェシウスの『人間論——人間の知的能力と教育』¹は「教育の科学」を建設する試みを含んでいた。²この書物の序文においてエルヴェシウスはつぎのように述べている。

「人間が教育の産物にすぎぬとすれば、……福祉と強大への手段は国民の手中にある。幸福で強大な国民となるためには、教育の科学(science de l'éducation)を発展させればよいのである。」³

こうして「教育の科学」なる概念はすでにエルヴェシウスの著作のうちに意識的に使用されているのである。

かかる概念を使用したことはエルヴェシウスの独創的な試みであった。彼とおなじく啓蒙の時代に生き、教育に大きな関心を寄せたルソーやデイドロなどですらこのような企ては示していない。

また、かの『百科全書——学問・芸術・工芸を論究した合理的辞典』を取りあげてみても、かかる概念は見いだされない。⁴

エルヴェシウスの『人間論』はこの点においてだけでも注目すべき著作である。しかも、そのなかで「教育の科学」なる概念は偶然的に使用されているのではない。それは彼の理論の生みだした必然的な産物であり、彼の思想の核心を表現する主要な概念なのである。筆者はかかる概念が成立する根拠をエルヴェシウスの思想の全体のなかに追求し、彼の意図した「教育の科学」の雄大な姿を浮彫にしたいと考える。⁵

二、歴史的背景

「教育の科学」の建設を企てたとき、エルヴェシウスはそれまでの科学の成果を吸収し、これをさらに新しい展開に導くことを意図していた。エルヴェシウスの「教育の科学」を理解するためには、それを科学の歴史の流れのなかに位置づけてみるが必要

要である。

近代における科学の発展は封建的世界観との激しい闘争を伴っていた。中世を支配したトマス・アクィナスの神学によれば、世界は神の創造したものであり、ここにおいて万物に授けられた調和的秩序は永遠でかつ不変のものである。このような教理にまず一撃を与えたのはいうまでもなくコペルニウスの発見であった。

なぜなら、彼等の発見を承認するとすれば、世界は神なしに説明でき、自然の法則は人間の理性によって認識できるとの結論が導かれるからである。

その後の科学の前進は自然が不変でかつ神秘的なものではなく、人間によって認識され変革されるものであることをますます明白に示していった。そして、このような科学の成果を表現してすでにデカルトはつぎのように述べていた。すなわち、理性による認識こそが、

「我々を自然の主人、自然の所有者たらしめるのである。」⁶

そして、宇宙の法則の洞察に始まった理性の認識はやがて天上から地上へと、無機体から有機体へと拡がり、ついには人間そのものにまで及んだ。このように人間をひとつの自然として、ひとつの生命体として検討する試みは早くはデカルトの著作のなかにも認められるが、その頂点をなすものはラ・メトリーの『人間機械論』であった。それは人間をひとつの機械とみなし、精神の活

動をすべて生理学的要因から説明する徹底した企てなのである。

「身体組織こそが人間のもつ第一の価値である。これまで精神について論じた人々は自然によって与えられるものではなく、反省と努力とによって獲得される才能だけを尊重すべき資質として挙げてきた。しかしこのような試みはすべて失敗なのである。」⁷

人間を自然的存在として把握する見解はラ・メトリーの生理学的観点とともにいまひとつの観点を有していた。それは人間の活動を気候や国土との関連において理解し、人々の間にみられる精神の相違を自然的環境の相違から説明する理論である。かかる理論の典型はモンテスキューの『法の精神』にはかならない。この書物によれば、各国の政治や道徳の相違はそれらがもつ風土の相違に由来するのである。

「猛暑は人間の力と勇気を弱める。反対に、寒い気候のもとでは強い肉体と精神が生まれ、それらが偉大な行為や大胆な行為を忍耐強く続けるのである。……したがって、暑い気候のもとでは国民は怠惰であってつねに奴隷となり、反対に寒い気候のもとでは国民は勇敢であってつねに自由を維持する。」⁸

これらラ・メトリーやモンテスキューの理論は神によって世界のすべてを説明する封建的世界観への明らかなる挑戦であった。も

しも、自然的諸要因によって人間の活動が決定されるとすれば、人間はもはや神の存在を必要としないであろう。しかし、このような理論、自然科学をそのまま適用した「人間の科学」はひとつの大きな欠陥を有している。なぜなら、身体組織や風土が人間によって変革できぬものである以上、生理学的・風土論的人間観もまたトマスの神学とおなじく人々を決定論へと導くからである。

かかる見解を批判することによってエルヴェシウスの「人間の科学」と「教育の科学」が成立した。それは合理的認識という科学の伝統を継承しながら、人間に固有な法則を探索し、人間がみずからを支配し変革するための有効な指針を発見することを意図するものであった。

三、人間の科学

(一)

封建制度に反対し、封建的イデオロギーと闘争するについては、エルヴェシウスとはかの「哲学者たち」とは完全に一致していた。エルヴェシウスの著作のなかにはスコラ哲学にたいする公然たる軽蔑が認められる。

「スコラ学者の学問とはどんなものか。それは言葉を濫用する学問、言葉の意味を曖昧にする学問にすぎない。スコラ学者はわけの分らぬ言葉を操って、ばかげた夢想を学問にみせ

かけている。」⁹

スコラ哲学は言葉と思弁によって空虚な議論と無益な博識を生みだす。かかる学問が真理の発見や国民の幸福と無縁であることは云うまでもない。しかし、スコラ哲学はいまなお思想と教育の世界に君臨している。なぜなら、それは教権と王権によって強く支持され援護されているからである。

「教権は世界を支配することを欲する。したがって、それは愚昧を世界に弘めることを喜ぶ。教権が意図するのは人々を盲目にすることであり、迷路に導く偽学問を人々に授けることである。それは人々が愚かになることを望み、人々が賢くなることを怖れる。では、このように人々を愚かにする仕事をだれが行うか。スコラ学者が行うわけである。」¹⁰

そして、かかる教権が王権と提携し、相互に援助し合う。なぜなら、この二つの権力はともに国民の意志に反して自己の個別利益を追求しており、このことによって共通の利害を有するからである。王権もまた国民の無知と愚昧とを望み、それゆえ、教権を保護し利用するのである。

「自己の恣意を充たすことだけを欲する専制者は国民の幸福について考えない。彼は国民の幸福には無関心である。そして、このような専制者がしばしば教権を利用し、自己の恣意と残虐とを正当化するのである。」¹¹

したがって、かかる二つの権力を背後にもつスコラ哲学は明らかに国民全体の利益に背馳する。それは真理を追求することを嫌悪し、国民を啓蒙することを拒否する偽学問なのである。

(二)

真理を発見し、国民の幸福を増進することはスコラ哲学の方法によっては不可能である。なぜなら、真理に到達できるのは言葉と思弁を弄ぶ者ではなく、事実と観察を尊重する者だけだからである。独断の方法は誤謬を招き、実証的方法是真理へと導くであろう。

「あまりに急いで原理を樹立すれば、混迷と誤謬を生み出すことになる。……体系を確立するにあたっては、それに必要な材料をあらかじめ蒐集することが大切である。」¹²

かかる実証的方法とは自然科学の方法にほかならぬ。自然科学に従事する者は事実と経験を積み重ね、観察と推理を継続する。このような方法だけが真理を発見し、国民に大きな利益をもたらすのである。それゆえ、人間について研究する者もまた自然科学から多くを学び、実証的方法を採用するがよい。

「実験物理学が曖昧で不確かな理論にまざるのとおなじく、人間および事象の研究に基づく経験的道徳が思弁的・神学的道徳にまざるのとはや否定することができない。」¹³

事実と観察の尊重こそが人間の研究においても大きな成果をも

たらすであろう。こうしてその時代における多くの「哲学者」たちと同様にエルヴェシウスもまた自然科学を模範とする人間の研究、「人間の科学」を主張するのである。

「精神的なものを扱うにあたっては諸科学を範とし、道徳を扱うにあたっては実験物理学を範とすべきであろう」¹⁴

(三)

しかし、自然科学の方法を採用するとは人間をたんに自然的存在として把握することではない。「人間の科学」は自然科学、すなわち生理学や生物学とおなじものであってはならない。それは人間を対象とする特殊の科学となるべきであり、人間を形成し、人間の精神を規定する特殊の要因を探求すべきである。自然科学をそのまま適用し、生理学的あるいは風土論的見地からのみ人間を理解する人々に反対して、エルヴェシウスはつぎのように述べている。

「ある人々は云う。すぐれた精神は一定の体質や身体組織から生みだされるものである。だが、まだいかなる観察もどのような器官、体質、食物がすぐれた精神を生みだすかを明らかにしていない。したがって、かかる主張は曖昧であり論証を欠いている。」¹⁵

また、諸国民の優劣を各国の地形や気候から説明する理論も誤っている。風土が変らないにもかかわらず、過去において偉大で

あつたギリシア國民がなぜ現在は無能であるか。かかる精神の相違を生みだすものはラ・メトリーやモンテスキューの云うような自然的諸条件ではなく、むしろ人間に固有な諸条件、社会的諸条件なのである。天才を造りあげるのは特殊な体質ではなくて、すぐれた環境と教育であり、偉大な國民を造りあげるのは特殊な風土ではなくて、すぐれた政治と法律なのである。

「人々の間に認められる精神の大きな不平等は彼等を支配する政治の如何、彼等が生まれる時代の如何、彼等が受けた教育の如何に、かつまたすぐれたものにならうとする欲望の如何、心に抱く觀念の如何にのみ由来する」¹⁶

それゆえ、「人間の科学」の主要な課題は人間のもつ固有の法則を発見し、精神を規定する社会的要因を究明するにある。こうしてエルヴェシウスは多くの資料を蒐集し、実証的方法を駆使しながら、社会的諸条件の解明を中心とする、独自の「人間の科学」を形成していくのである。

四、「教育の科学」（広義）

(一)

かかる要因、人間のもつ社会的諸条件の總体をエルヴェシウスは「教育」なる概念で呼んでいる。この意味における「教育」とはたんに青少年の訓練や学習を指すばかりでなく、人間に影響す

るさまざまな社会的環境を表現する。人間を教育するのは

「政治形態、友人、愛人、周囲の人々、および読書などであり、かつまた偶然——無知でいるならば、連鎖と原因の不明な無数の出来事——なのである」¹⁷

このように社会的諸条件の總体を意味するのが「教育」の概念であるとすれば、自然的諸条件の總体は「自然」なる概念によって表現される。そして、この二つの概念を使用することによって、人間の形成についての主要な問題をつぎのように云いあらわすことができる。

「精神は自然の授けるものであろうか。それとも精神は教育の造りあげるものであろうか」¹⁸

かかる問題にたいして人間の優劣が自然によってさだまると答える者はすぐれた精神を形成する努力を無益とみなすであろう。なぜなら、人々のもつ生理学的・生物学的条件は生まれながらのものであり、人間によって変えることのできぬものだからである。

「自然が天才を生み出すという信念がどれほど科学と教育の進歩を妨げ、人々の怠惰と怠慢を助長してきたことか」¹⁹

しかし、人間を形成するのは「自然」ではなく、「教育」である。精神の優劣を決定するのは生理学的・生物学的条件ではなく、社会的なもの、後天的なものなのである。

「自然と教育が我々に与える影響を吟味してみると、我々を

形成するものは明らかに教育なのである。したがって、教育を改善する方法について注意を喚起し、真理を提示することは市民の義務であろうと考える。²⁰

「自然」が先天的なものであるのたいし、教育は人間によって支配し改善できるものである。それゆえ、「教育」が人間を形成するという認識こそが人々に大きな希望をもたらすのである。

(二)

とはいえ、人間の形成に及ぼす「教育」の影響はこれまで軽視され放置されてきた。かく放置された「教育」がよき結果を生むことは稀である。そして、これこそすぐれた精神の少い理由なのである。

「天分はだれもが所有している。だが、天分を伸ばせるような環境は珍らしい。」²¹

かかるときには「教育」の作用は気まぐれで偶然的であるように思われる。しかし、「教育」のさまざまな作用を観察し検討する者はそこに一定の法則を認めるであろう。そして、このような法則を認識し利用するならば、「教育」の作用を規制し、すぐれた精神を造りだすことが人間に可能となるのである。

「天才の数を増そうと望む者は……偶然がどのようにして少数の天才を生みだすかを観察し、それとおなじ環境を多数の人々に授けるがよい。」²²

かくして観察と実践とによってすぐれた精神の形成が偶然的なものから意図的なものへと変る。社会的諸条件を解明し、それを改善するならば、偉大な人物を無数に育成し、国民の幸福を無限に増進することが実現できるはずである。

「偶然が偉大な人物を生み出す方法を観察し、かかる観察に基づいてすぐれた教育を立案するならば、国民のなかに多くの偉大な人物を造りあげることが可能となり、偶然の支配を無限に縮小することが可能となる。」²³

国民を福祉と強大とに導くものはすぐれた精神である。かかる精神はすぐれた「教育」、すぐれた社会的諸条件の産物にほかならぬ。それゆえ、社会的諸条件のもつ法則を認識し、すぐれた「教育」の構想をたてることが国民の切実な課題となる。そして、このとき、「教育」を観察し改善するための科学、「教育」の科学が成立するのである。

「人間が教育の産物にすぎぬとすれば、……福祉と強大への手段は国民の手中にある。幸福で強大な国民となるためには、教育の科学を発展させればよいのである。」²⁴

(三)

「教育」が社会的諸条件の総体を意味するのに対応して、「教育の科学」は社会的諸条件の総体を改善することを本来の使命とする。したがって、「教育の科学」は広大な領域をもつ科学、い

わばひとつの総合科学としてまず現れる。

人間を形成するさまざまな社会的諸条件のなかでとりわけ重要なものは政治である。国民的規模で考えるならば、精神の優劣は政治の善悪によってさだまるとさえ極言することができる。

「自由政治のもとでは人々は率直で忠実で勤勉で情深く、専制政治のもとでは人々は低劣で嘘つきで下賤であり、天分も勇気もない。こうした性格の相違がみられるのは彼等が相異った政治のもとで相異った教育を受けるからである。」²⁵

すぐれた精神を輩出させるのは天才と徳を要求し優遇する政治だけである。かかる政治は主権が国民に存する国においてのみ実現できる。なぜなら、個別利益の支配を排除し、一般利益の支配を確立する法律を制定することは専制者が君臨する国では不可能だからである。

「有徳な人間を形成するためには、すぐれた法律を制定することが肝要である。……そして、かかる法律の制定にあつては人間の心情を認識することが必要である。」²⁶

それゆえ、「教育」の改善は政治と法律の改革から出発し、これに照応して「教育の科学」は「政治の科学」、「立法の科学」を基底とする。こうしてこの新しい科学は「人間の科学」の一層の発展としてひとつの総合科学、政治をはじめ社会的諸条件の総体を改善するための科学として成立するのである。

五、「教育の科学」（狭義）

(一)

しかし、エルヴェンクスにおける教育の概念は社会的諸条件の総体を指すばかりでなく、より限定された意味にも使用されている。狭義における教育とは

「教師によって与えられる少年期の教育」²⁷
にほかならぬ。

教育は政治とともに人間の形成に大きな影響を及ぼす。すぐれた精神の産出には政治の改革が必要であるとはいえ、教育の改善を伴わぬ政治の改革は充分の効果をあげえない。

「すぐれた立法の構想はすぐれた教育の構想を含む。これによって、市民は道徳についての明確な観念を習得し、一般利益を愛するという唯一の原理を習得するのである。」²⁸

個人的規模で考えるとすれば、精神の形成において教育の果たす役割はきわめて重要である。おなじ国民の間に認められる人々の相違はおおむね少年期の教育の相違に由来する。パスカルが述べたように、天性とは教育によって植えつけられた最初の習慣なのである。

「幼いときから労働、節儉、忠誠の習慣を植えつけければ、かかる習慣が失なわれることは稀である。」²⁹

したがって、すぐれた精神を生みだすためには狭義における教育を改善することがとりわけ重要である。そして、このような要求に促されて、より限定された意味における「教育の科学」が成立する。かかる「教育の科学」の固有な課題は教育の方法と内容を検討し、青少年の教育を改善するための有効な方策を立案することにある。こうして総合科学として「教育の科学」のなかに青少年の教育を独自の対象とする科学、個別科学としての「教育の科学」が現れるのである。

「いったい教育の科学とはどのようなものか。教育の科学とは望ましい徳と才能を人々に習得させるための、方法の科学にほかならぬ。」³⁰

(II)

教育の改善を意図する者は人間そのものを研究することから着手すべきである。なぜなら、人間の本性に立脚した理論だけがすぐれた教育を生みだすであらうから。それゆえ、人間について固有の法則を発見する「人間の科学」こそ教育を改善するための基礎理論を提供し、「教育の科学」の土台をなすのである。

「哲学者は人々を幸福にすることを研究の目的とする。かかる幸福は人々に授けられる法律と教育に依存する。そして、法律と教育を改善するためには、人間の心情と精神を、それらのさまざまな作用を、かつまた、道徳の科学、政治の科学、

教育の科学の発展を妨げる障害をあらかじめ認識することを必要とする。」³¹

「教育の科学」にはつぎのような問題が課せられている。すなわち、いかなる知識が習得する価値のあるものか、またいかにすれば人々にそのような知識を習得させることができるか。それゆえ、すぐれた教育の立案を志す者はなによりも学習すべき知識と学習する能力について学ぶことが必要である。そして、「教育の科学」は事実と観察に基づく「人間の科学」の成果を源泉として発展するのである。

「すぐれた教育という問題は二つの事柄に還元できる。すなわち、その第一は、……青少年に記憶さすべき事象と観念の種類をさだめることであり、その第二は榮譽と尊敬への愛を彼等のうちに確実に燃えさせたせる方法をさだめることである。」³²

「教育の科学」は教育内容論と教育方法論とに大別できる。そして、教育内容論は主として「人間の科学」における知識論の成果をもとにして、教育方法論は主として人間の科学における能力論の成果をもとにして形成されるのである。

(III)

エルヴェシウスの知識論と教育内容論は公益の理論を中軸として展開されている。人間のもつさまざまな知識を考察する者はそ

れらが三つの種類に分類できることを見いだすであろう。知識は個人の利益に合致するもの、特殊社会の利益に合致するもの、および公共の利益に合致するものに分けられる。これら三種の知識のうちでもっとも価値あるものは公共の利益に合致し、国民全体の福祉に役立つような知識である。スコラ学者の尊重する知識は個人の利益や特殊社会の利益には合致しても、公共の利益なる観点からすればまったく無意味なものである。

「公共の利益に直接かかわる観念とは商業、政治、戦争、立法、学問および芸術にかんするものである。」³³

かかる知識、現実の生活において有益であり、国民の福祉を増進する知識を青少年は習得すべきであろう。したがって、教育内容の改善はラテン語の偏重を排除することから始まる。

「母国語の学習にも一定の時間を捧げることが望ましい。死語の学習のため七、八年も費やすことはどばかけたことがあるか。それは現実の生活にはほとんど使用されないものがあり、それゆえ学校を出れば、すぐに忘れてしまうものなのである。……また味気ない言葉の学習に代えて物理学、歴史、数学、道徳、詩などの学習を置く。」³⁴

ことが望ましい。

公益の理論はとりわけ道徳教育に面目を一新することを命令する。道徳教育は宗教的道徳を排除し、市民的道徳を内容とすべき

である。それは真の徳とは公共の利益を増進する行為であること教え、かかる行為に役立つ知識を学ばせるべきである。

「『おのれの欲せざることをひとにほどこすなかれ。』このような道徳原理は副次的で、家庭的な格律であり、市民が祖国にたいしなをなすべきかを教えるにはまったく不十分である。かかる原理に代えてつぎのような原理を樹立するがよい。『公共の利益、これこそ鉄則。』この原理こそ明快かつ普遍的なものであり、またきわめて有益であって、いかなる職務の人間にも適用できるものである。そして、かかる高尚な原理を習得したあとで、はじめて日々の権利にかかわる各国の法律にまで降りてきて、自己の責務を知り、自国の慣例、法律、風俗の賢愚を判断できるのである。」³⁵

(四)

エルヴェシウスの能力論と教育方法論は平等の理論を中心として展開されている。人間を認識に駆りたて、知識を獲得させるものは情念である。それゆえ、精神の優劣は情念の強弱に依存する。しかし、情念はもともと万人に共通なものであり、人々の能力は素質においては平等なのである。

「怠惰を克服し、注意を持続するに必要な情念を有すること、かくして輝かしい理性の光を獲得することはすべての人々に可能なのである」³⁶

しかし、情念の強弱は後天的な環境と教育によって決定される。すぐれた精神は強い情念、すなわち尊敬や榮譽への愛から生みだされる。それゆえ、かかる情念を喚起し、持続する教育こそすぐれた教育の名に値するであろう。そして青少年の胸に強い情念を燃えさせたためには、競争心を刺激し、生活を規律する集団教育が適切であろう。このような理由によって、公教育は家庭教育よりもはるかにまさるのである。

「青少年を駆りたてる動因は主として恐怖と競争心である。

そして、競争心は多くの人々と自己を比較することから生み出される。徳と才能への愛を燃えあがらせるには競争がもつとも確実な方法である。しかし、自分の家ではこのような比較は不可能であり、したがってそこでの教育はそれだけ効果が少ない」³⁷

すぐれた精神を形成するためには集団教育とともに早期からの専門教育が必要である。なぜなら、情念の強弱は集中の程度に依存するからである。情念はひとつの対象に集中されたときに、はじめて激しく燃焼し、偉大な結果を生みだす。個性に即応した早期からの専門教育によってすべての人々は自己の能力を開発し、すぐれた精神へと成長できるのである。

「子供を画家にする場合を考えてみよう。できるだけ早くからクレヨンを握らせるがよい。はじめは正確な版画を手本と

して画かせよ。ついて浮彫を手本として、さらには美しい模像を手本として画かせよ。……そしてまた、ラファエル、ギュイード、コレッジオなどの絵を見せてみよう。これらの絵のさまざまな美しさを教え、素描、構図、配色などの秘訣をつぎつぎと学ばせよう。それとともにこれらのすぐれた画家たちに授けられた榮譽を話して聞かせることによって、子供の競争心を喚起しよう。かくしてすぐれた教育が子供を画家に育てるのである。」³⁸

五、「すぐれた教育」の実現のために

(一)

このような方向に教育の科学を發展させ、すぐれた教育を確立すれば、国民は福祉と強大へと導かれよう。しかし、かかる教育の実現は現実にはきわめて困難である。なぜなら、多くの国家には

「教育の科学の發展を妨げる障害」³⁹が存在するからである。

この障害の第一は専制政治にはかならぬ。支配者の個別利益を志向する専制政治は国民の無知と愚昧とを歓迎する。それゆえ専制政治のもとでは公共の利益を考慮し、教育を改善しようと試みることは無益である。

「悪しき政治のなかですぐれた教育を立案したと仮定しよう。この新しい教育はそのときの政治と道徳に矛盾するはずである。したがって、かかる教育の立案は悪とみなされる。」⁴⁰

「教育の科学」にたいする第二の障害は教権支配である。教権もまた自己の個別利益を追求しており、国民が真の知識を獲得することを望まない。教権の授ける教育は偽りのものであり、国民に狂信と偏見を吹きこむにすぎない。

「道徳教育を改善することへの第二の障害は聖職者の利益である。」⁴¹

それゆえ、すぐれた教育を実現するためにはこれらの障害を除去することが肝要である。教育の改善を意図するならば、専制政治を打倒し、教権支配を駆逐することから着手すべきであろう。

「人間を形成する技術はすべての国において政治のあり方と密接に結びついている。したがって公教育の主要な改革は国家の組織そのものを変えずにはおそらく不可能である。」⁴²

よき政治とは国民全体の利益を志向する政治である。かかる政治は国民の幸福を増進する人物を要求し優遇する。政治がこのように改革されたとすれば、「教育の科学」を発展させることに多くの人々が参加し尽力することは明白である。

「教育の改善もまた明らかに立法者の知恵に依存する。立法者が古い慣習にたいする盲目的尊敬から教師たちを解放し、

彼等の天分を自由に飛翔させたとき。褒賞への希望を与えることによって、彼等が教育の方法と競争の手段を改善するように仕向けたとき。かかる希望を授けられたとすれば、生徒の精神を導くのを専門とする教師たちが教育を最高の段階にまで高めないことは不可能である。」⁴³

(二)

しかし、専制政治と教権支配が続くかぎり、教育の改善を云々する者は非難され迫害されるであろう。とはいえ、このような政治のもとにあっても哲学者は「教育の科学」を発展させるよう努力すべきである。なぜなら、科学の発見する真理はやがては国民に大きな利益をもたらすであろうから。なぜなら、真理を嫌悪する政治もやがては変化し崩壊するであろうから。真理は有益であるという思想、社会は変化するという思想こそが人々に勇氣と希望を与える。そして、激しい迫害を招くにもかかわらず、公共の利益のために尽力することが哲学者に真の幸福を感じさせるのである。古い勢力からの非難と攻撃のなかで「教育の科学」の建設を試みたエルヴェシウスは「人間論」の終末近くに力強くつぎのように書き記した。

「これまでも多くのすぐれた人物が教育の問題を解明した。だが、現実の教育は依然として変らない。なぜか。すぐれた教育を立案するには聡明であればよいが、それを実現するには

権力が必要だからである。それゆえ、教育の分野ではすぐれた業績があるにもかかわらず、現実はまだ変化していない。このような事実をみる者はかかる業績を無益なものだと考えよう。しかし、それらは教育の科学を実際に前進させてきたのである。いま新しい機械が技師によって発明された場合を考えてみよう。その機械がすぐには製作されずとも、かかる発明は有益なはずである。このように科学が前進したとしても、その成果である機械が製作されぬうちは、国民はまだなんらの利益も受取らない。しかし、機械がすでに発明されたとすれば、あとはそれを製作するための財源をみつけることだけが問題なのである。そして、そのような財源はやがては見いだされるものなのである。

かかる楽しい理想が教育の科学の研究へと哲学者を激励する。それは有徳な市民にふさわしい研究である。なぜなら、それは真理の研究であり、真理の認識はいつかは人類に大きな利益をもたらすからである。後世の人々が幸福になるという希望のほかにもどのような希望がこの研究を慰めるであろうか。かかる研究の生みだす発見とはいわば種子なのであり、それはすでにすぐれた精神のうちに播かれ、あとはただ成長を促すような出来事が訪れるのを待てばよいのである。

愚者の眼は精神の世界を絶えざる静止と不動の状態として

把握する。彼にはすべてがつねに不変であるように思われるだが、聡明な人間はこれとは異った見方をする。彼にとつては精神の世界もまた不斷に変転し、つねに新しい光景を生みだす。それは絶えず運動し、つねに新しい形態に生まれ変わる。ここではあらゆる変化が可能であり、可能性にすぎなかったこと、仮想にすぎなかったことが実現され現実となる。

それゆえ、哲学者は遠きにせよ、近きにせよ、やがては権力も賢者の提出する新しい教育の構想を採用するであろうと考える。こうした希望に励まされ、かかる構想を妨げる偏見をあらかじめ取除くよう努力するのである。⁴⁴

註

エルヴェンシュスの著作については *Oeuvres complètes d'Helvétius*. 2 vols. London, 1781. を使用した。以下の諸註における括弧内の数字はその巻数と頁数である。

(1) *Helvétius, De l'Homme, de ses facultés intellectuelles et de son éducation*. この書物は一七六九年ごろにはほぼ完成したと伝えられる。しかし、その内容のためにこれはエルヴェンシュスの死後にはじめて公刊された。

(2) これまでの教育史家はかかる事実にたいしてなんらの関心も寄せていない。たとえば、エルヴェンシュスの教育思想を主

- 題「イタリヤの書物 Ian Cumming, Helvétius—His life and place in the history of educational thought, London, 1955. さら「教育の科学」の概念についてはいまもよく触れられなから。
- (3) Helvétius, De l'Homme, Introduction. (Ⅱ～2)
- (4) 『百科全書』のなかには例の「人間知識の系統図」にならぬ諸科学の分類があり、また教育に関するものについてはこの項目が見いだされる。すなわち、Collège, École, Éducation, Enfant, Étude.
- (5) エルマヘンナスの「教育の科学」は教育学説史にならぬどのような位置を占めるであらうか。かかる位置づけは重説やあふたはじえ、現在の筆者の能力をはるかに超えた仕事である。ここには彼の「教育の科学」そのものだけを紹介し、教育学説史におけるその位置については諸著者ならぬの御教示をお願いしたい。
- (6) Descartes, Discours de la méthode. (Oeuvres choisis de Descartes tome 1, p. 54) ((Classique Garnier,))
- (7) La Mettrie, l'Homme Machine, 1865, Paris, p. 70.
- (8) Montesquieu, De l'Esprit des lois tome 1, p. 267. (Classique Garnier),
- (9) Helvétius, De l'Homme, Section I, Notes. (Ⅱ～10)
- (10) Ibid., Introduction. (Ⅱ～4)
- (11) Ibid., Section I, Notes. (Ⅱ～18)
- (12) Ibid., Section II, Notes. (Ⅱ～130)
- (13) Ibid., Section II, Notes. (Ⅱ～130)
- (14) Helvétius, De l'Esprit, Préface (Ⅰ～71)
- (15) Helvétius, De l'Homme, Section II, Chapitre 1. (Ⅰ～50)
- (16) Helvétius, De l'Esprit, Discours III, Chapitre 30. (Ⅰ～293)
- (17) Ibid., Discours III, Chapitre 1. (Ⅰ～155)
- (18) Ibid., Discours III, 1. (Ⅰ～154)
- (19) Ibid., Discours III, Chapitre 30. (Ⅰ～293)
- (20) Ibid., Discours III, Chapitre 30. (Ⅰ～293)
- (21) Ibid., Discours III, Chapitre 30. (Ⅰ～292)
- (22) Helvétius, De l'Homme, Section I, Chapitre 3. (Ⅱ～20)
- (23) Ibid., Section 2. (Ⅱ～143)
- (24) Ibid., Introduction. (Ⅱ～2)
- (25) Ibid., Section X, Chapitre 1. (Ⅱ～417)
- (26) Helvétius, De l'Esprit, Discours II, Chapitre 21. (Ⅰ～144)
- (27) Helvétius, De l'Homme Section X, Chapitre 9.

man for a perfect life, and for that end must endeavour to develop his mental and physical faculties in a well-balanced fashion. Moral education must be based on intellectual training. And the method of education should be such that would encourage an individual to use his capacities voluntarily to acquire knowledge.

Spencer advocated an education which placed importance on the individual and which aimed at a harmonious adjustment of man to society.

SCIENCE OF EDUCATION ACCORDING TO HELVÉTIUS

by Hideo Nagaya

A Postgraduate Student of Tokyo Kyoiku University

“A Treatise on Man, his intellectual faculties and his education” by Helvétius published in 1772 included an attempt to establish a science of education. It was a plan to build a new science concerning man, using methods of natural science.

According to Helvétius, what formed man was not natural environment but social conditions, or rather “education” in a broad sense. In order to recognize the effects of such “education” and to improve it, a science of education was necessary. The aim of this science is none other than to establish a sound political system which would make possible ideal education for the young.

The promotion of such a science would greatly benefit a country, since though power may temporarily impede the progress of education, society inevitably changes, and truth eventually will triumph as a thing most beneficial to man.